10



自分の感情を古語で表現したいなど、むし 決して古典が嫌いなのではなく、積極的に 業には抵抗があるが、そこから離れると、 ろ古語に興味をもっている。 生徒たちは、難解な解釈中心の古典の授

声にのせることで、、語り物、の楽しさを 定した。作品中に自分が入り込む感覚で創 体感させる。 なりのドラマを加えて新たな演出をして音 を味わわせることをねらいとし、自分たち 作することで、生き生きとした古典の世界 『NEW平家物語』を創作する」課題を設 そこで今回は、「登場人物の台詞を考え

家物語」の世界にひたらせたい。 源平の戦乱の中にあって、自らの人生を精 一杯生き抜いた登場人物になりきって「平 古典の中の人物は、みな魅力的である



## 2 実践報告(全4時間)

夫し、グループごとに朗読発表をす ①物語の情景や心情が伝わるよう工

る。互いの発表を聞き合う。

## (1) 学習計画

① 「平家物語」のおおよそのあらす

1 次〔1 時間〕 いて学習する。②源平合戦・軍記物語・語り物につ

調、和漢混淆文、対句表現を理解す葉や語形、助詞を省いた表現、七五③歴史的仮名遣い、文語文特有の言

①古文と口語訳を読んで、場面の状

2 次〔2 時間〕 ②場面の状況と人物の心情を表す台 詞を考える。

平家物語」の台本を作る。 ③グループごとに、 朗読劇「NEW

④練習をする。

3 次〔1 時間〕 ②意見・感想を交流する。

## (2) 2次の詳細

しており、 平知盛・平家方の武士・女房など)にな りきって、台詞を考えてみる。 人物(安徳天皇・建礼門院・二位の尼・ 十一「先帝入水」の場面を紹介し、登場 **全体で** 登場人物の性格がはっきり 台詞も多いことから、巻第

書き入れる。(資料1) を想像し、台詞を考え、ワークシートに 各自で「扇の的」の登場人物の心情

※「口語から文語へプリント(筆者作)」や「古 語辞典」「国語便覧」を参考にして、 きる生徒には文語を使わせてみる。

面に分け、 **全体で** 「扇の的」をABCDEの場 (資料2) 場面ごとに台詞を考えてい

ェ ※台詞を考える際、原文からかけ離れた勝 るべきかを発表し合う。 めには、どの場面で、だれの台詞を入れ 物語をわかりやすく感動的に伝えるた [グループ〈四人〉で] 朗読劇台本を作る。

るように工夫する。 手な解釈に陥らないよう気を配る。台詞 は、感情だけでなく、場面の状況もわか

練習をする。 **グループで**朗読の役割分担・工夫・

声の調子をどうすればよいかを話し合 朗読になるよう、どんな気持ちを込め、 原文も台詞も場の状況にふさわしい クシー トに書き入れる。

**グループで** 台本をもとに練習をす

り良いものをつくっていく。 る。聞き合い、アドバイスをし合い、よ

※朗読は、源平の役割分担・群読などの工 さを出せるよう、よく練習する。 夫をする。「平家物語」特有の調子の良

## 3 おわりに

ていくにつれ、人物の心情を想像し、その ジすることができた。また、内容を理解し 位置や表情を話し合う中で具体的にイメー 段階では理解が困難な生徒も、人物の立ち 読み取ろうと努力していた。個人で考える 正確な理解が不可欠なので、 台詞を書くためには、まず状況や行動の 生徒は真剣に

> 文語への抵抗が少なくなってきたようだ。 積極的に古語や係り結びを使う生徒もおり、 なげることができた。 色や語調であることから、人物像や感情の 友人の発表が自分のイメージと異なった声 気持ちが伝わる言葉を考えることに、楽し て、意見交換を通し、さらに深い鑑賞につ とらえ方が微妙に違うことに気づいたりし になりきった快感を得ることができたり、 んで取り組んでいた。文語の調べを好み、 台詞を声に出すことで、物語の中の人物

作品の心情や情景を読み取る力や、 物語」の理解だけにとどまらず、他の文学 る力の習得にもつながるだろう。 この登場人物になりきる学習は、「平家

自害して、人に二度面を向からべからず。いま一度本国
「展える」(真が人に対えるにつうまとな。)
と心のうちに祈念して、目を見聞いたれば、風も少し吹」に入れて刺抜いたが、に対しいなど、によったをにつといったなでは、この矢は〇させたはあな。」
「よった」とればしめさば、この矢は〇させたはるような。」
と心のうちに祈念して、目を見聞いたれば、風も少し吹」による方のを刺でくだされば、中と訳がした。というなる方のを刺でとないというなどによっていた。というなどには、こうなどによっていた。というなどによっていた。これによっていた。というなどによっていた。これによっていたっていた。これによっていたっていた。これによっていたっていた。これによっていた。これによっていた。これによっていた。これによっていた。これによっていた ) (いながら、) (い)(かなど) つ。小兵といら何めら、十二東三伏、弓は強し、浦響くつ。小兵といら何めら、十二東三伏、弓は強し、浦響く 与一、かぶらを取るてつがの、よのびいてのもうと放ったり、) (静えて射やすくなていたのかがないよのびいてのもうと放 あやまたず扇の要ぎ四一寸ばかりおい いて、いきないであることがあったうにあって、いまないのかで、いまかり扇のように海に散って ICE T 平たも気けてはかられぬし

源氏「源氏の面目 保ちたま

安徳天皇「あの扇にあ

敵ながら、あっぱ 五十ばかりなる男

「与一、言いにく

建礼門院「あか」 選託「那須の兵」

御定ぞ。

的は、

を誠ぼさん

伊勢三郎義盛

進ぜようぞ。」

あの距離 射当てることは

源氏「あたれ!」

もここまでか。

平家「さすがに、この<sup>6</sup>

この距離を

のに扇を射られるはずがな 神が手をかしてくれ安徳天皇「風も強く波も高い 与一「風が弱まった。 舞でもご覧にいれ 事な技、ひとつ しくじることなき

特集これからの古典指導